

自分らしく暮らす 認知症と私



辰川会グループ
社会福祉法人さんよう理事長

辰川 和美さん

京都市出身。広島大教育学部
心理学科卒。医療施設の経営
やデイサービス・特別養護老人
ホームなど介護事業を運営する。
認知症の人の生活しづらさや、
家族の不安・困惑に対する支
援を続け、ライフワークとして取
り組んでいる。

「秋の日はつるべ落とし」と言って、日暮れが急に早くなる時期ですね。この頃になると、思い出すことがあります。

認知機能低下のため要支援1になった家人が、まだ自宅で暮らしていた時のことです。八〇歳で身体は元気だったこともあり、デイサービスにはなじめず。かと言って特に何をするでもなく、自宅でテレビの番や庭いじりなどをして毎日を過ごしていました。暇があるとビールに手が伸びてしまう人でしたから、「じっとしていないで散歩にでも行ったら」と、言うのが私の口癖でもありました。

家人は、そんなことをふと思い出してはちよくちよく散歩に出かけていたようでした。時には、泥だらけになった靴が脱ぎ捨ててあり、どこまで行ったのかとビックリしたこともありました。

◆一人で散歩したこと…

ある秋の夕方、仕事を終えて帰宅

すると家人の姿がありません。あわてて二階の部屋も、庭も風呂場まで探しましたが、どこにも居ないのです。スニーカーがなく玄関の鍵が開いていますから、散歩に出たと思われます。元々山を切り開いてできた住宅地ですから、照明の明るい大きな建物などはなく、夕闇が迫つてくると辺りは一気に暗闇に包まれます。暗くなったら、見つけられない！と不安が募ります。

携帯をつかみ、あたりを探しながらジリジリする思いで呼び出し音を鳴らし続けると、「おー、あんたか、散歩に出たんじゃが、どこに居るか分らんじゃ」と案外のものびりした家人の声です。「パパどこに居るの?」「それが分からん…どこか分らん」と。「今、周りに何が見える?」どんな建物がある?教えて!」とのやり取りの後、それほど遠くない場所にある集合住宅の名前を言うことができました。「じっとしてよ、絶対動かないでよ!」といったなくなりつく言い置いて、車で駆け付け、ライトに浮か

び上がった姿を見た時はほっとしたものです。たとえ近くであつても、暗くなつてからでは見つけることは難しいであろうと実感しました。

◆つさの判断で助けられ

またこの一年後にも、夕方に姿が見えなくなり、家族総出で探す事がありました。散歩帰りの少し暗くなつてきた道端で足を滑らし転倒。仰向けで起き上がれずいたところ、家人のポケットで鳴り続けている携帯電話に気付いた近所の方が応答してくださり、助けに行くことができました。地域の人のとつさの判断と協力に深く感謝し、幸運を喜びました。

認知症介護において「思いがけないことが起こる」という事実は多くの人を経験されていることです。「変化」に対応しにくい認知症の人にとって、季節の変わり目も戸惑うことのひとつかもしれません。



GPSやタグを装着できる靴で道迷い対策を!
(株)アスポート引野店で撮影

日が短くなる秋。
夕方の散歩に気をつけて。